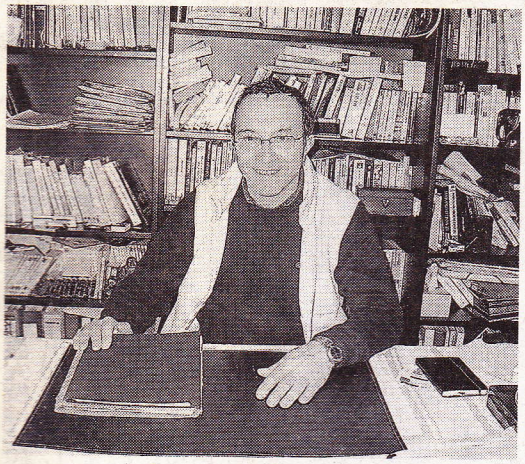
日本新聞　（第3種郵便物認可）

日本とアラブのより良い未来のため

「英語介さず理解を」

イラク戦争などをきっかけに日本では、アラブ世界あるいはイスラム圏の文化を理解する重要性が論じられるようになった。一方、アラブ人側にも日本とアラブの関係の重要性を説く人がいる。このほど、日本におけるアラブ世界観の歴史をひもといた著書「日本とアラブ人」をフランスで出版したレバノン出身の研究者ベッサム・タイヤーラ氏に、日本がアラブをどうみてきたか、今後どういう関係を築くべきなのか、聞いた。

（パリ・井手季彦）



日本とアラブの文化交流を訴えるベッサム・タイヤーラ氏

「日本とアラブ人」著者 タイヤーラ氏

互いの言語知る努力重要

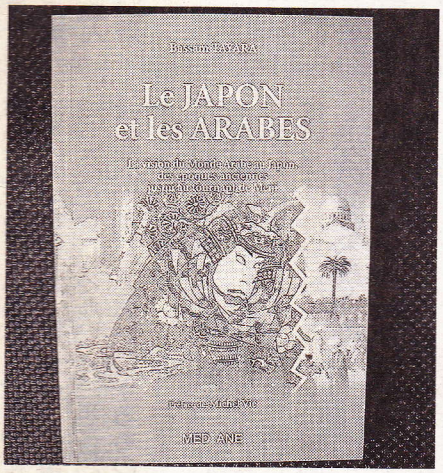
■戦後2回のピーク

―日本のアラブ研究にはどんな歴史があるか。

「明治の前半までは、英国に植民地化されたエジプトなどに関心と同情を持ち、日本が植民地とならないための研究が中心だった。だが、日本が初めて英国、米国、ドイツ、フランスなど先進諸外国との連合作戦に参加した一九〇〇年の北清事変を境に、支配する側の方法論を学び、朝鮮半島や中国を植民地化するために使おうとした」

―第二次大戦後はどうか。

「七三年の石油危機と二〇〇一年の米中枢同時テロ直後の二回、数多くのアラブおよびイスラムに関する書物が出版され、表面的には研究熱のピークを迎えた。だが、それらの多くは英語での研究を翻訳したもの。米英型のアラブ研究は、利害にかかわる分野に絞って行うやり方なので、文化全体の理解にはつながりにくい。ただ、この二つの時期以外は、直接アラビア語を通した地道な研究が積み重ねられた」



タイヤーラ氏の著書「日本とアラブ人」。古代から明治時代までの日本のアラブ世界観を膨大な資料をもとに詳述している

■アラビア語は必要

―日本では外国の情報を得るには、どうしても英語に頼ってしまう。

「日本は〝イスラムの海〟に囲まれていることを理解すべきだ。インドネシアやマレーシア、パキスタンのほか、中国にも約一億のイスラム教徒がいるといわれる。彼らの話す言語は異なるがイスラム文化を理解するにはアラビア語が必要だ」

―アラブにおける日本語はどうか。

「現状は同じで、英語を通した情報で日本が分かった気になっている人も多い。中国は約十年前からアラブやアフリカ諸国に中国語を学ぶ場をつくり、助成している。石油確保のための関係強化が最終的な目的であるのは分かっているが、日本も単なる経済援助だけでなく、こういう努力をもっとしたほうがいい」

■双方に利点がある

―イラク戦争での自衛隊派遣がアラブ人の対日観に影響したか。

「政府の方針と市民の心が必ずしも一致しないのはアラブ諸国も同じ。日本に敵対心がないのはわかっている。一般のアラブ人は日本のことを、文化や伝統を保持しながら近代化に成功した例としてみている。アラブ諸国では〝近代化イコール西洋化〟と考える人が多く、近代化すると自分たちのアイデンティティーまで失ってしまうのではないかと恐れているが、日本はそうではない」

―国連教育科学文化機関（ユネスコ）の文化多様性委員会で、日本とアラブの文化交流を訴えたそうだが。

「アラブ人には、アラブ世界を統一するという夢みたいとメディア交流の一層の拡大などで合意していたが、台湾当局は今回の措置により、国民党の「独断専行」を形だ。

台湾、中国記者を追放

「反国家分裂法」に対抗

て「不合理であり、中台のメディア交流を後退させる」と批判したが、台湾の記者を中国から追放する報復の可能性については否定した。

ミャンマー議長辞退